

主体の解釈学

1982年1月20日(第二時限) pp. 126-146

大学院生 M(今日はいつも増して声が聞き取りにくいかもしれません。ごめんなさい。)

三つ目の帰結としての老年(pp. 126-p.131 l.6)

- 自己の実践の時期が思春期の終わりから成熟した年代へと移行したことから、二つの帰結を導き出した
- 1つ目は自己の実践の批判的な機能
- 2つ目は医術との近縁性

→これに伴って生じた帰結: 自己へ配慮することは自分の魂と身体に同時に配慮することになる

- 三つ目は老年が新たに重要性を、価値を持つようになったということ

→かつては望ましいものではなかったが、老年こそが自己の実践全体の肯定的瞬間、達成の瞬間、頂点となる

◇ 老年の定義:

自分自身を快く感じ、自分自身に満足している者、自分にあらゆる喜びと満足をおきそれ以外のものからはいかなる快樂も、いかなる喜びも、いかなる満足も求めない、つまりもはや叶わなくなった身体的な快樂も、すでに諦めた野心の快樂も求めない者のこと(p.128 l. 7-l. 9)

→一つ目の帰結: 人は自己に追いつき、自己との間に統御(とうぎよ)と満足という完成された完全な関係を取り結ぶ

⇒老年が望ましい地点なら、正の終わりとして捉えるのではなく生存の積極的な目標と考えられるべき

↑この主題に関して特徴的なセネカの手紙があった

…生涯を通じて、あなたの背後に、あなたを追いかけているひと、敵がいるのを感じなさい。この敵とは、人生の偶発事であり、厄介事です。それはとりわけ、あなたが若者の、あるいは成年の時期にあって、まだ何かを望み、快樂に執着し、力やお金を欲しがっている限り、そうした偶発事があるうちのうちに引き起こしうる感情や動揺のことです。これがあなたを追い立てている敵なのです。…(p.129 l. 13-16)

- 二つ目の帰結: 進んでいくべき老年は、理念的な老年であっていわば作り上げられる老年、それに備えて訓練がなされるような老年でもある
- これが老年の新しい倫理の中心点だが、まだ十全に活動している時でも、自分の振る舞いやありように対して、すでにそれが終わってしまったかのような態度、行動、無頓着さ、覚悟を持たなくてはいけない(自分の行いを客観的に見るということ? 一歩離れてもう一つ高い視点で自分を見るということ?)
- セネカの 32 番の手紙にもこの表現がある: 「自分の死よりも先に、生を完遂しなくてはならない。死の瞬間が訪れるよりも先に、自分の生を完了してしまわなくてはならない。…」(p. 130 l. 14-l. 15)
↑セネカがルキリウスに急いで向かって欲しいと思っているのはまさにこの地点
- 自分のせいに対して老人のようにならなくてはならない、と言った考えは一連の重要な問題に関連している
- 自己によって得られる満足、快樂に関わる問題で、老いと不死との関係の問題でもある
=老いはどのような点で、不死及び死後のせいという主題を先触れし、先取りし、あるいはそれと関連していたのかという問題

自己への配慮の一般化と教团的な現象の説明 (p. 131 l.7-p.134 l.5)

- 自己の配慮は一『アルキビアデス』における一思春期の急務から一帝政期、紀元1から2世紀には一成年期

あるいは成年期と現実的あるいは理想的な老年期との年代的に移動したが、年代的な拡大や移動ではなく、量的な拡大

- 他人を統治したいのだったら自己へ配慮しなさいということは言われなくなっていき、自己へ配慮することが普遍的な原理として現れるようになった

→ 自己への配慮は今や一種の普遍的な理論の方を為すものであるということができののだろうか？

- 全体において方法論的な論点となるのは西欧文化の漸進的な^{ジュリディフィケーション}法律化のこと
- この法律化によって法やその形式は人間的な実践の領域におけるあらゆる規則の一般的な原理と考えられるようになっていく

しかし

- フーコーが示したいのは法そのものが、挿話ないしは過渡的な形式としてはるかに一般的な歴史の一部をなしている、つまり法は結局のところ、主体の自分自身に対する技術の可能な側面の一つにすぎない、ということ

↓ここから、上記の問題に対して、ヘレニズムおよびローマ文化の中で一種の普遍的な法とみなされることができたのかに論じていく

- 自己に専心できるのは明らかにエリートの特権
↑というも、自己に専心するには、閑暇という贅沢をあがなえるだけの生活が必要だった
- それはひとつの特殊な生活の形式で、他のあらゆる生活から区別されている
⇒つまり、実際に古代の文化やギリシア・ローマの文化では決して自己への配慮は普遍的な法として捉えられ、建てられ、主張されたことはなかった
- 自己への配慮は信徒団体や友愛団体、学校や教団の実践ないしは組織に結びついている
- 古代の文化においては、自己への配慮は実際に原則として一般化されたが、常に教団的な現象につながり、教団的な現象の上にたって分節化されていた
- 自己への配慮がどれだけ幅広いものだったかについて
- 自己の実践は貴族階級だけでなく、恵まれない階級でも一般に宗教的な集団の存在と非常に強く結びついていた
- この集団は明確に制度化された集団で、儀式化された手続きを持っていたため、自己による自己の個人的な探求、分析、仕上げの作業をしなくても済むようにしてくれた

礼拝する庶民からローマの友愛の貴族ネットワークまで (p. 134 l. 6-p. 135 l. 14)

- これは友愛のネットワークに依拠していた
- ローマにおける友愛は、奉仕や義務の相対によって結び付けられた諸個人のなす階層構造であり、宗教的共同体と並ぶ自己の実践の大きな土台
- 何度か出てきたセネカ、ルキリウス、セレヌスはこの種のことについて話していた

例) セレヌス(地方から野心満々でやってきて、ネロの宮廷に入り込もうとする若い親類)がおじ、あるいは遠い親戚に会う。その場にいた、年長者であり重要な地位にいるセネカは、おじに義理がある。こうしてセレヌスはセネカの友愛の圏域に入ってくることになる。セネカはセレヌスに「魂の助力」と呼べるものを与える。(例えば、何を学ぶべきなのか、何を学ぶべきではないのかなど…)

- 魂の助力は終局的な共同体の中でも展開されていたが、友愛のネットワークにも組み込まれていた

さらに二つの事例(p.135 l.15-)

- 事態はもっと複雑であって、これを表す例を2つ挙げる
- 1つ目:エピクロス派の集団の例
- この集団の政治的傾向は貴族的な傾向と対立する民主主義的なもので、一定の理論的で哲学的な考察を少なくとも教説の習得を前提としていた←この教説の習得が重要だった
- 2つ目:アレクサンドレイアのフィロンが『観想的な生活について』で描くところのテラペウタイ派の集団
- このテラペウタイ派には三つの軸三つの次元があった
 - ① 宗教的、礼拝的な実践(日に二度のお祈り行い、毎週の集会では座席が年齢順に定まっている…というもの)
 - ② 知的、理論的な作業、知に関する作業の全体にはっきりと力点が置かれている
 - ③ 自己による自己の統御を求め、他のあらゆる美德の基礎であり根本であると考えていた
- 自己への配慮はやはり、信仰に関わるものや治療に関わるもの、そして知、理論の様々な配合を持った、一定の、互いにはっきり区別されたネットワークないし集団の中で形成されると考える必要がある
- また、自己への配慮はただ集団の内部においてのみ、つまり一定の区別をはらんでいる限りでの集団においてのみ実践される

呼びかけの普遍性と選出の希少性(p.138 l.14-p.142 l.5)

- こういう集団の多くは、都市や社会で見られるような身分や地位の差異を踏襲することを拒絶していた
↑アルキビアデスでは自己への配慮は身分的な差異に組み込まれていた
↓一方で
- ここまで出てきた集団の多くは原則として、貧富の区別、輝かしい生まれを持つ者と無名の家族に属する者の区別などを有効なものとして認め、受け入れることはしない
=つまり、一般にあらゆる人々が自己を実践し、この実践を行うことができる
- しかし、皆が自己の実践を行うことができるとしても、実際に自己へ配慮できる人はごくわずかしかない
→ここで、エピクテトスのテキストの例を用いる
デルフォイの掟が文明世界の真ん中にある石に刻まれていながら、「〈汝自身を知れ〉は容認しうる人間共同体の地理的な中心に神によって置かれてありながら、知られておらず理解もされていない。」(p.139 後ろから1行目-p.140 l.1)と述べている。また、「…ソクラテスが街頭で若者たちに問いかけて、その内の何人かがそれでも彼の言うことを聴き、自分たちに配慮するようになるまでに、彼はいったい何人の若者たちに問いかけなくてはならなかったか。…」(p.140 l.2-1.4)
- ここには[自己を受け入れる]能力がある者となない者の間の操舵的な分割が見出せる
↑この差異を規定しているのは自己への関係、自己への関係の形態ないしは型、自分自身を実際に気遣いの対象として練り上げてきたそのやり方である
- あらゆる人に向けられながらわずかな人にしか聞き取られない声の代表的な形式、普遍的でありながら一部の救済しか実現し得ない呼びかけの代表的な形式がある
- ここにある二つの要素(呼びかけの普遍性と救済の稀少)を持つ形式において、西欧においては自己及び自己への関係が問題化されていた
↑自己の^{テクノロジー}技術体系において分節化されているのが見られる、あるいはむしろ自己の^{キュルチュール}陶冶を生み出したの

であり、この内部においてこそ呼びかけの普遍性と稀少との間で最高度に機能しているのが見られる

- この救済(自らを救うこと、自らの救済を行なうこと)という考えがそもそも全ての中心にある
- 思春期における自己への配慮→老いるための自己への配慮へ導いてきた年代の意向の結果、自己の配慮の目的、目標は何かという問題が提起されていた
=健康でいることや、病を免れていること、死に向かいながら、しかもある意味で死から自らを救うということ、これは一体どういうことなのか
↑これらは全て、万人へ向けられた呼びかけに対応するはずでありながら、しかし事実上はいく人かだけのものでしかあり得ないような救済の主題系へと導いていく

次回予告(p.142 1.6-1.9)

- 「自己自身を涵養(かんよう)し」、「自己自身へ配慮する」ことが、どのようにプラトン主義に見られるようなものとは異なった、様々な関係の形式や、可能な知と認識の対象としての自己の練り上げを生み出したか、という側面について話す

〈感想・疑問点〉

- (レジュメ1 ページ目の下の方にも書きましたがもう一度こちらにも掲載します。) p. 130 の7行目から11行目あたりまでで言われている、「まだ十全に活動している時でも、自分の振る舞いやありように対して、すでにそれが終わってしまったかのような態度、行動、無頓着さ、覚悟を持たなくてはいけない」というのは、自分の行いを客観的に見るということでしょうか？ 一歩離れてもう一つ高い視点で自分を見るという解釈で合っていますか？
- p.129 の後ろから10行目からのセネカの発言(レジュメ1 ページに記載)は、現在のXで偽ツイートをして閲覧数を上げて広告料を稼ぐ人と重なる部分が多いなと感じた。